

文部科学省委託研究

「平成29年度全国学力・学習状況調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」（国立大学法人お茶の水女子大学）

◆研究概要

※文部科学省の委託により国立大学法人お茶の水女子大学(代表:浜野 隆教授)が分析

- 本研究は、平成29年度全国学力・学習状況調査の追加調査として実施した「保護者に対する調査」の結果を活用し、家庭の社会経済的背景(SES)と学力の関係、平成25年度調査からの変動、学力に影響を与える学校・家庭・地域の取組等、多様な観点から、統計的に分析。
- また、事例分析として、学校がおかれている社会経済的背景(SES)に比して、継続的に高い学力成果を上げている学校及び成果が上がりつつある学校の特徴も分析。

<保護者に対する調査>

調査対象：抽出した公立学校において、本体調査を実施した児童生徒の保護者

	保護者*		(参考)学校**	
	対象数	有効回収数(率)	対象数	有効回収数(率)
小学校	60,167	55,167 (91.7%)	1,186	1,153 (97.2%)
中学校	77,491	67,309 (86.9%)	799	692 (86.6%)

* 児童生徒の結果と結合できる保護者の回答数

** 1人以上の保護者が有効回答だった学校数

調査時期：平成29年5月

調査内容：保護者の子供への接し方、教育についての考え方、子供が通っている学校の状況、家庭の状況

◆項目

1. 家庭の社会経済的背景 (SES) と学力の関係
2. 「非認知スキル」と子供の学力
3. 不利な環境を克服している児童生徒の特徴
4. 学校風土と子供の学力
5. 家庭環境と子供の学力
6. 事例分析

【注】家庭の社会経済的背景(SES(Socio-Economic Status))：

「保護者に対する調査」結果から、家庭所得、父親学歴、母親学歴の三変数による合成指標。これを四等分し、Highest, Upper middle, Lower middle, Lowestに分割して分析。

1. 家庭の社会経済的背景(SES)と学力の関係

(1) 家庭の社会経済的背景(SES)と学力

- 平成25年度調査と同様に、SESが高い児童生徒の方が各教科の平均正答率が高い傾向にある。
- SESが低い層で、より各教科の平均正答率のばらつきが大きい。(変動係数が大きいほど、ばらつきが大きい。)

【注】「学力」は、各教科の平均正答率を指す。

	小6							
	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答率	(変動係数)	平均正答率	(変動係数)	平均正答率	(変動係数)	平均正答率	(変動係数)
Lowest SES	68.00	(0.30)	48.44	(0.51)	69.68	(0.33)	36.29	(0.60)
Lower middle SES	72.69	(0.26)	54.45	(0.43)	76.21	(0.27)	42.29	(0.52)
Upper middle SES	76.59	(0.22)	59.68	(0.38)	81.00	(0.23)	47.68	(0.47)
Highest SES	81.99	(0.18)	67.36	(0.32)	87.58	(0.17)	57.69	(0.41)
合計	74.79	(0.25)	57.44	(0.42)	78.58	(0.26)	45.94	(0.52)

	中3							
	国語A		国語B		数学A		数学B	
	平均正答率	(変動係数)	平均正答率	(変動係数)	平均正答率	(変動係数)	平均正答率	(変動係数)
Lowest SES	70.43	(0.28)	63.14	(0.43)	52.84	(0.45)	38.78	(0.50)
Lower middle SES	75.56	(0.23)	69.96	(0.35)	61.45	(0.37)	44.90	(0.45)
Upper middle SES	78.94	(0.21)	74.26	(0.31)	67.40	(0.31)	49.66	(0.41)
Highest SES	84.76	(0.16)	81.39	(0.25)	77.08	(0.24)	58.90	(0.35)
合計	77.29	(0.23)	72.02	(0.35)	64.47	(0.36)	47.88	(0.45)

図表1 SES別の各教科の平均正答率と変動係数

(2) 家庭の社会経済的背景(SES)の学力への影響の変化 －平成25年度と平成29年度の結果比較－

- SESの学力への影響の変化は、小・中学校ともに教科により様々であり、全体としての傾向を明確に読み取ることは難しい。

	H25	H29		H25	H29
国語A(小6)	0.344	0.291	国語A(中3)	0.292	0.311
国語B(小6)	0.299	0.300	国語B(中3)	0.262	0.282
算数A(小6)	0.341	0.338	数学A(中3)	0.381	0.398
算数B(小6)	0.345	0.350	数学B(中3)	0.370	0.361

図表2 SESと各教科の平均正答率の関係

【注】数値は標準化回帰係数を示す。値が大きいほど、影響が強い。

2. 「非認知スキル」と子供の学力

- 家庭の社会経済的背景(SES), 「非認知スキル」, 子供の学力がそれぞれどのように関連するのかを検討。
- 「非認知スキル」は, 子供の学力にゆるやかな相関があり, 小6の方が中3よりも学力との相関がやや強い。
- 一方, 「非認知スキル」とSESの間には, あまり相関が見られない。
- こうしたことから, SESの高低にかかわらず(SESが相対的に低い場合でも), 「非認知スキル」を高めることができれば, 学力を一定程度押し上げる可能性がある。(ただし, 今回の分析では両者の間にゆるやかな相関があることが確認できたにすぎないため, この可能性がどの程度確かなのかはさらなる検討を必要とすることに留意。)

	小6			中3		
	総正答率 (国語算数AB)	「非認知スキル」	SES	総正答率 (国語数学AB)	「非認知スキル」	SES
総正答率 (国語算数AB)	1			1		
「非認知スキル」	0.27	1		0.20	1	
SES	0.38	0.15	1	0.39	0.10	1

図表3 SES・「非認知スキル」・学力間の相関係数

- 保護者の適切な働きかけは, SESの高低にかかわらず, 子供の「非認知スキル」を高める傾向があり, 小学生でより強い影響がある。

<「非認知スキル」の向上を規定する主な保護者の働きかけ>

- 子供のよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている。(小6・中3)
- 子供に努力することの大切さを伝えている。(小6・中3)
- 子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている。(小6・中3)
- 毎日子供に朝食を食べさせている。(中3)
- 地域社会などでのボランティア活動等に参加するよう子供に促している。(中3)

(参考) 「非認知スキル」尺度得点の算出方法

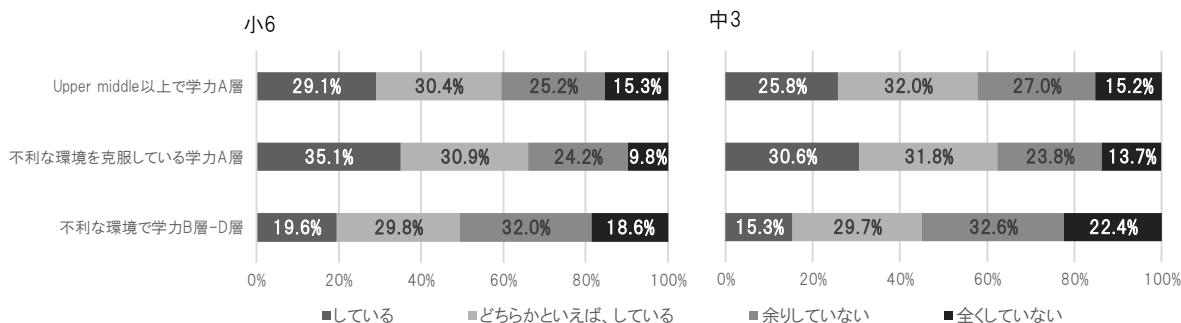
「非認知スキル」とは, 一般的には, 自制心や意欲, 忍耐力などを指す概念であるが, 本研究では, 「児童生徒質問紙」の設問から, 以下の8項目を合成して算出。

- ものごとをさいごまでやり遂げてうれしかったことがある。
- 難しい問題でも, 失敗を恐れないで挑戦している。
- 自分には, よいところがあると思う。
- 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。
- 友達と話し合うとき, 友達の話や意見を最後まで聞くことができる。
- 友達と話し合うとき, 友達の考えを受け止めて, 自分の考えを持つことができる。
- 学級会などの話し合いの活動で, 自分とは異なる意見や少数意見の良さを生かしたり, 折り合いを付けたりして話し合い, 意見をまとめている。
- 学級もみんなと協力して何かをやり遂げ, うれしかったことがある。

3. 不利な環境を克服している児童生徒の特徴

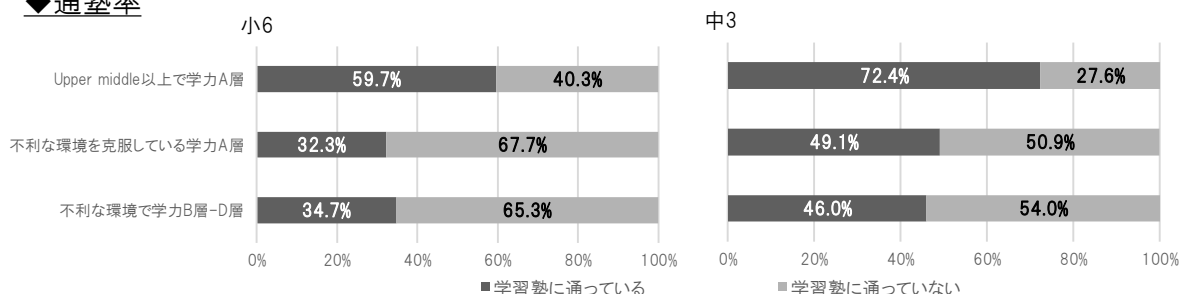
- 家庭の社会経済的背景(SES)が低いにも関わらず、高い学力水準(総正答率が上位25%(学力A層))に位置する子供(不利な環境を克服している児童生徒)の特徴を分析*。
- 不利な環境を克服している児童生徒の保護者は、同じSESで学力B層-D層である場合に比較して、規則的な生活習慣を整え、文字に親しむように促す姿勢、知的な好奇心を高めるような働きかけを行っている点が特徴である。また、行事やPTA活動に参加するなど、学校教育に対する親和的な姿勢が見られる。
- 不利な環境を克服している児童生徒は、ものごとを最後までやり遂げる姿勢や、異なる考えをもつ他者とコミュニケーションする能力等の「非認知スキル」が高い傾向がある。
- 不利な環境を克服している児童生徒は、授業の復習を重視する傾向が強く、学校で習う内容の着実な定着を図る取組が、高い学力水準の支えになっていると考えられる。
- 不利な環境を克服している児童生徒は、塾などに過度に頼らなくとも一定の学習時間を確保しており、そのことが学力獲得に結びついていると考えられる。

◆学校の授業の復習



図表4 学校の授業の復習をしているか

◆通塾率



図表5 学習塾に通っているか

* SESの違いに起因する差と学力水準の違いに起因する差を踏まえた分析を行うため、以下の3者を比較。
 ・ 不利な環境を克服している児童生徒(SESがLowestで学力A層の子供)
 ・ 学力水準が同じでSESが違う層(SESがUpper middle以上で学力A層の子供)
 ・ SESが同じで学力水準が違う層(SESがLowestで学力B層-D層の子供)

【注】 学力層は、児童生徒全員の正答数分布の状況から四分位により分類し、正答数の高い順に、学力A層、学力B層、学力C層、学力D層としたものである。

4. 学校風土と子供の学力

- 児童生徒の学習意欲などのいわゆる「学校風土」は、学力とどのような相関関係にあるのか。平成25年度から平成29年度までの5年分の学校を継続的に調査したパネルデータを作成し、継続的に高い学力をマークする学校の特徴を明らかにした。
- 学校風土得点の向上は、学校の社会経済的背景(SES)の高低にかかわらず、学力向上にプラスに作用する。

(参考) 学校風土の測定

本研究では、調査対象の児童生徒について、以下の5項目の加算変数を標準化した得点で学校風土を測定。

- 熱意をもって勉強している。 ○ 授業中の私語が少なく、落ち着いている。 ○ 礼儀正しい。
- 学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができる。
- 学級やグループでの話し合いなどの活動で、相手の考えを最後まで聞くことができる。

5. 家庭環境と子供の学力

- 以下の場合に、子供の学力が高い傾向がある。

<保護者の働きかけ>

- 学校の出来事、友達のこと、勉強や成績のこと、将来や進路、地域や社会の出来事やニュース等、会話が深い。
- テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間などのルールを決めている。
- 子供に努力することの大切さを伝えている。
- 子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている。

<保護者の教育意識や諸活動への参加>

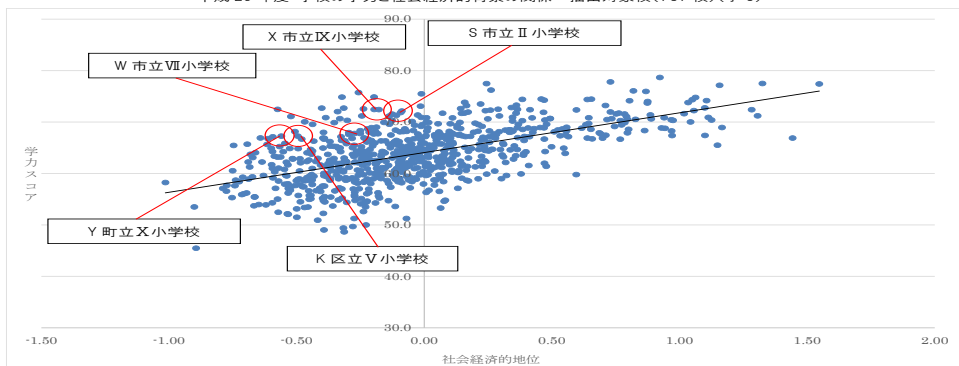
- 将来、子供に留学してほしいと思っている。
- 自分の考えをしっかりと伝えられるようになることを重視している。
- 地域や社会に貢献するなど人の役に立つ人間になることを重視している。
- 保護者自身がPTA活動や保護者会などへの参加している。

6. 事例分析

(1) 過去5年間にわたり、継続的に成果を上げている学校

- 平成25年度から平成29年度の5年間、在籍児童生徒の社会経済的背景(SES)から予測される学力水準を継続的に上回る学校について事例分析を行った。

平成29年度・学校の学力と社会経済的背景の関係—抽出対象校(757校)(小6)



図表6 学校の学力とSESの関係(小6)

<平成29年度調査で特徴的に見られた点>

平成25年度調査で見られた取組は確実に実施されており、さらに手厚い取組として、以下が共通の特徴。

- 家庭学習習慣の定着と家庭への啓発、一人も見逃さない個別指導
(例:放課後や昼休みなどに個別に呼んで手厚くきめ細やかに指導。)
- 若手とベテランが学び合う同僚性と学校の組織的な取組
(例:面倒見の良いベテラン教師と学年を組む。初任者や若手教師の研修機会を生かして全校教師が学び合う。)
- 小中一貫教育による一貫した学習の構え
(例:小中で家庭学習の方法、学習ルールや授業スタイルを統一。話し合いや書く力、読書習慣・言語指導の重点を共有。)
- 言語活動や学習規律などを重視した授業改善の推進
(例:子供の名前を出しながら授業研究を行う。考えを伝え合うための支援や場の工夫。)
- 地域や保護者との良好な関係を基盤とした積極的な地域との連携
(例:地域の一員として、防災活動に取り組む。自治体でキャリア教育を推進。地域人材リストの作成。)
- 学力調査の分析・活用による児童生徒一人ひとりの学力形成
(例:一人一人の子供の学習状況に着目。前年の学習定着の課題を教師で共有、授業改善に活用する。)

(2) 成果を上げつつある学校

- 平成26年度までは在籍児童生徒の社会経済的背景(SES)から予測される学力水準を下回っていたが、平成29年度にはSESから予測される学力水準並みになった中学校の事例一校についてインタビューを行った。

<学校の環境整備>

- 児童生徒が学びに向かうことのできる環境を整える(例:新校舎落成, エアコンの導入)。

<行政による条件整備>

- 県と市からの各種の教師加配により、人員が増えた。
(直接効果) 3クラス4展開の少人数指導, 学力調査の分析が可能となった。
(間接効果) 加配による新たな取組等に関して教育委員会との密接に連携により, 教師集団の納得を得て, 研究・研修面での新たな取組を促進することが可能になった。

<校長のリーダーシップ>

- 原因を見極め、方向付ける。
- 学習指導の改革以前に、生徒・保護者との信頼関係の回復を図る努力が奏功。
- 動く教師から動かす、教師集団への指針の提示と対話(繰り返し訴える)。